

少女新聞

発行者
澁川女子高校
新聞委員会
(2-3)

発行日
R5年10月10日

沖繩戦の歴史から 道徳を考える

今年度、二年生の修学旅行は、四年ぶりに沖繩に行きます。群馬とは全く違う南国の自然や文化に直接触れられることも楽しみですが、沖繩戦の歴史から平和について学ぶことも非常に大切なことです。そこで、今回は修学旅行の事前研修を兼ねて、沖繩戦の実態とその中に垣間見られた道徳的思考について考えます。

「ひめゆり学徒隊」

一九四五年三月から約三ヶ月にわたって繰り広げられた沖繩戦。死者十八万人、沖繩県民のおよそ四人に一人が亡くなったと言われていいます。日本軍は兵力不足を補うため、十代の生徒まで戦場に動員しました。県内の二校の女学校の十五歳から十九歳の生徒で構成されたのが「ひめゆり学徒隊」です。

沖繩県那覇市安里にあった「沖繩師範学校女子部」と「沖繩県立第一高等女学校」の生徒・教師二四〇名で構成され、二校の愛称が「ひめゆり」だったので、「ひめゆり学徒隊」と呼ばれました。



学徒隊は南原にあった沖繩陸軍病院で患者の世話を担当しました。その病院は兵隊のための病院で壕の中に粗末な二段階ベツドが並んでいました。生徒たちは患者の排泄物の処理水や食事の世話、包帯交換の手伝いを休む間もなく行っていました。患者や生徒の食事は、最終的にビンボン玉くらいのおにぎりが一日一個になってしまいました。戦闘の激しさが増すとともに、壕は重症患者でいっぱいになり、生徒が寝る場所はなく、壁にもたれて仮眠をとる程度でした。飲食がままならないため、生徒たちは生理や排便がなくなり、青白くやせ細っていく、高熱に襲われて倒れるものが出るなど、劣悪な環境の中、看護にあたっていました。

米軍の上陸作戦

「ガマ」とは石灰岩で形成された鍾乳洞のことです。米軍が日本軍司令部に迫ってきたため、日本軍は南部撤退を決め、陸軍病院と「ひめゆり学徒隊」も南部に撤退しました。生徒達は軽症の患者とともに薬品などを背負い南部へ移動しましたが、重症の友人や患者は病院壕に残していかざるをえませんでした。南部へ撤退した生徒達は「ガマ」に入ったものの、十分な広さや医薬品はなく、看護を続けることができませんでした。このような状況の中、米軍はジュネーブ条約を破り、民間人も確かめず、「ガマ」という「ガマ」で人の気配があれば、煙幕を張る黄リン弾や手榴弾を投げ込み、機関銃や火焔放射を浴びせ、しまいに戦車で穴ごと踏みつぶすなど、無差別・理不尽な攻撃をおこないました。

突然の解散命令

一九四五年六月十八日に「ひめゆり学徒隊」は日本軍から「解散命令」を突然告げられました。「解散命令」とは、「各自自らの判断で行動せよ」ということを意味したため、生徒達は砲弾の飛び交う南部を逃げ惑うこととなりました。壕を出た生徒達は、茂みや岩陰に身を隠し、海

「神風特別攻撃隊」

「俺たちの苦しみと死が俺たちの父や母や弟妹たち、愛する人たちの幸福のためにたとえ僅かでもやくだつものなら。」

一九四五年四月一日、米軍の沖繩上陸を阻止するために出撃した日本軍の若い兵士の言葉です。彼らは「神風特別攻撃隊」、通称「特攻隊」と呼ばれました。「飛行機に二五〇kg爆弾を積んで、米軍の空母や戦艦めがけて体当たりする」という使命を帯びて出撃しました。



この作戦を考え出し実行した当時の日本政府・日本軍とは無関係な私たちから見れば、まさに非道徳的・非人道的行為であり、それは全世界の誰もが疑うことのない事実でしょう。しかし、違う立場から見ると、この行為が道徳的行為であったというように考えられる可能性もあるかもしれません。皆さんは、捨て身で出撃した特別攻撃隊員は、この戦争がどうなる

岸へ追い詰められていきました。米軍に捕まり各地の収容所に送られた者や、日本軍の降伏を知らず壕に隠れ続けていた者もいました。「解散命令」は結果的に、生徒達を米軍の攻撃の中に放り出し、犠牲の飛躍的增加を招いてしまったのです。

米軍の激しい攻撃が続く中で、米軍の捕虜になることを恐れ、住民らの集団自決が行われました。沖繩県南部に位置する荒崎海岸一帯では、多くの人が逃げ惑い右往左往し、その中に一部「ひめゆり学徒隊」がいました。六月二十一日、平良松四朗教諭引率の生徒らは突然米兵に自動小銃で攻撃され、混乱の中、手榴弾で自決し、十人が命を絶ちました。また、重症の兵士に毒が入った飲み物が配られ、死に追いやられたことも「集団自決」ということもありま

「集団自決」の背景には、日本軍が「住民も兵士とともに命をかけて国を守れ」という指導方針をとり、住民が米軍に投降することも許さなかったということがあります。「ひめゆり学徒隊」十名が自決した場所には、現在「ひめゆり学徒散華の跡」の碑が設置されています。

と考えていたと思いますか。自爆攻撃の成果で勝てると思っていた人はほんとういなかったでしょう。ほとんどの隊員は、「勝てはしないが、アメリカが無条件降伏をあきらめ、停戦協定が結ばれるといいな」とか、「絶対、負ける」と思っていたに違いありません。それでも上官の命令に背くことなく出撃していきま

した。彼らが出撃していった理由・動機は残すためだったのではないのでしょうか。そう考えると、特攻隊員の立場から見ると、この行為は道徳的行為であったと考えることもできるのではないかと思います。

このように私たちの世界には、他者が作り出した非道徳的・非人道的行為であっても、道徳的行為と自分に言い聞かせるようにして従うしかない場合が生じてしまうこともあるのではないのでしょうか。そのように考えると、「道徳とは何か」という命題は非常に難しい問題であることを思い知らされます。

戦争は狂気（非道徳行為）を容認する

これまで述べてきたように、戦争という異常な状況においては、敵も味方もなく、すべての人間が物事を理性的に考え、判断することができなくなってしまうのです。その結果、非道徳的・非人道的な行為がその真偽を確かめられることなく、正当な行為として容認され、受け入れられてしまうのです。

修学旅行を自己のあり方・道徳的な生き方を考えるきっかけに

戦争を知らない私たちにも、沖繩で起きた悲惨な出来事、「戦争」の恐ろしさを知ると同時に、平和の大切さについて未来へ伝え続けていかななくてはならないという使命があります。私たちにとって、沖繩修学旅行がただ楽しい旅行で終わることなく、世界平和や人類の共生、文化の発展などに貢献する社会の一員としての自己のあり方・道徳的な生き方について考えるきっかけになることを期待しています。